カムザシ

こしあつくぞおはしける、

〔空穂物語 國讓上一〕御とし十七さいばかりにて、御ぐしいとめでたし、

〔空穂物語 樓の上下二〕御ぐしはいとをよりかけたるやうにて、ほそはぎにはづれたり、

〔歴世女裝考 二〕髮筋をかんざしといひし事

和名抄 冠帽の具の部に簪 和名加無左之 插冠釘也とある、此簪は冠の紐を係て落ぬやうにしておく物なりといへり、然れば今のかんざしとは異り、さて又今より七八百年の中昔に至りて、かんざしといふ名目あり、○中略 雅亮裝束抄 卷上 五節所の事といふ條に、ゑりくし、まきくし、かんざしをぐして五せち所ごとに、おきまはるなり、同卷 に姫君のさうぞくといふ條に、とらの日 中略 するゑ 今いふかもじの事 ひたひ、かみあげまうく、かんざし、さいし四筋あるを、本所にまうく、からくし、ゑたくし、ゑりくし、をぐし、ゑかい、これらはくら人かたに、まうくとあり、前にもいへる如く、和名抄に、簪の字加無左之と訓せたれど、此かむざしは冠の紐を係る釘のやうなる物の名なり、然るに後の世にいたりては、右に引たる古今集にも裝束抄にも、かんざしとあるを、古今の歌のはしがきに、かんざしの玉のおちたりけるをといひしに據て考れば、今の花かんざしのやうなる物にやありけん、確證を得ざれば強てはいひがたし、さて前に引たる本居大人が源氏を注したる玉の小櫛に、かんざしとは、髮のさしざまといふ事といはれしは、げにさる事にて、往古はさら也、近き三百年前までも、髮すぢを、かんざしといへり、貴船本地 文明の頃のお伽艸子、さいしき繪入寫本、 下の卷に、父がむすめを折檻する所、御たけにあまりたるかんざしを手にからみ、ゑやけんのゆかにひきふせて、又富士人穴草子 東山殿比のか伽さう し、寛永九年板全二册、 上卷、女をほめる詞に、三十二相ぐそくして、たけなるかんざしはせいたいがたていたに、こうろぎのすみをながしたるごとくなり、虫のこうろぎの墨に髮のつやをたとへたる也、せいたいは板へながしてつくる物とぞ、 按に三百年前までも、今のやうなるかんざしといふ、目につく髮のかざりなかりしゆゑ